

放送教育だより 第61号

東北・北海道地区

期日：令和6年10月24日(木)・25日(金)

会場：東京第一ホテル鶴岡（山形県鶴岡市）

昨年の北海道大会に続き対面開催された研究協議会では、「放送視聴利用促進における課題と改善策について」をテーマに、2時間にわたり参加6校間で現状の共有と議論が行われた。

東北・北海道地区では、本年度実施した加盟校事前アンケートによると「計画的・継続的な放送視聴の活用」が進んでいないようだとのことであった。また「対面での面接指導」VS「NHK 高校講座」という二項対立の構図に囚われてしまっているのではないかと推測される記述が垣間見られた。調査結果を受けて、どちらが尊いという発想ではなく、例えば反転授業に高校講座を使ってみるなどいろいろな活用法を試してみて、またそういった取り組みを知らない先生方にも知ってもらう機会を作ることができればよいのではないかと（その一翼を担うべく、他分科会のように研究発表校を設けることも検討すべきかもしれない）というやり取りがあった。一方で、高校講座番組を活用するにあたっては生徒の視聴ログを採ることができればいいのという声があり、こちらに関してはシステムの整備が望まれる。

NHK エデュケーショナルからは、NHK 高校講座 新作番組（探究科目について、従来科目と異なりスタジオでの台本の無いディスカッションに重点を置いている）の紹介や、ホームページの新機能（動画の10秒スキップ機能や再生速度変更機能、中断地点からの再開機能）についての紹介があった。高校講座活用に役立てることができればと考える。

近年馴染みになってきているZoomやMeet等ビデオチャットツールをどのように活用していくことができるかなどについても意見交換が行われ、各校積極的にICTを活用しながら今の時代の学習環境がどうあるべきか模索している様子が伺える、とても有意義な時間となった。それぞれが持ち帰った課題は、自校内での議論を経て、次回の協議会で前向きな提案につながっていくものと期待される。

（放送教育研究委員 NHK学園高等学校 森山 了一）



関東地区

■令和6年度 関東地区放送教育研究会

相談役 : 森川 覚 (NHK学園高等学校 校長)
委員長 : 山崎秀樹 (東京都立一橋高等学校 副校長)
副委員長 : 原田柊太 (東京都立砂川高等学校 副校長)
委員 : 矢島直人 (栃木県立宇都宮高等学校 教諭)
委員 : 藤澤さとみ (埼玉県立大宮中央高等学校 教諭)
委員 : 熊走翔 (東京都立一橋高等学校 主任教諭)
委員 : 川合広太郎 (NHK学園高等学校 統括教諭)
委員 : 森山了一 (NHK学園高等学校 統括教諭)
委員 : 大澤浩祐 (神奈川県立横浜修悠館高等学校 教諭)
委員 : 山崎久登 (東京都立砂川高等学校 教諭)
委員 : 新村久瑛 (東京都立新宿山吹高等学校 教諭)
教育部専任部長 : 櫛田 晃 (NHKエデュケーショナル)

1 委員会開催日時・議事について

- 第1回 4月26日(金) 午後3時から5時まで
 - ・令和6年度放送教育委員事務分担について
 - ・令和5年度活動報告案について
 - ・令和6年度活動計画について
 - ・第76回全通研 広島大会の参加について
- 第2回 5月24日(金) 午後3時から5時まで
 - ・第76回全通研広島大会の分科会運営について
 - ・各地区通研大会への派遣について
 - ・7地区放送教育研究委員長を交えての情報交換
- 第3回 6月28日(金) 午後3時から5時まで
 - ・全通研広島大会のまとめ
 - ・各地区通研大会への派遣について (最終決定)
 - ・放送教育研究委員会研修について (NHK高校講座番組収録見学)
- 第4回 11月1日(金) 午後3時から5時まで
 - ・7地区放送教育研究委員長を交えての情報交換
 - ・NHK高校通信教育委員会への要望
 - ・「放送教育だより」「放送教育研究」の原稿依頼
- 第5回 1月17日(金) 午後3時から5時まで
 - ・各地区通研大会の報告
 - ・1年目研究委嘱校; 進捗状況 (中間報告向け)
 - ・第77回香川大会分科会での発表等について

2 活動報告について

- 「全通研放送教育研究」43号発行 (6月)
 - ・NHK学園担当 内容: 全通研大会発表予定校の研究報告、地区通研放送教育研究委員の活動状況報告
- 「放送教育委員会だより」61号発行 (3月)
 - ・委員長が集約 内容: 各地区通研大会の放送教育分科会の研究内容の集約
- 全通研広島大会 6月13日(木)・14日(金)

・研究協議会 第5分科会【放送教育】

(中国地区) 鳥取県立鳥取緑風高等学校 教諭 森澤公雄

鳥取県立鳥取緑風高等学校 教諭 磯尾朋子

「生徒の自立した学習態度の育成をめざしたNHK高校講座の効果的活用」

(中部地区) 長野県長野西高等学校 教諭 久保田文彦

「オンライン添削学習システム「添削くん」の開発と手書きメソッドの有効性に関する考察」

・指導助言者 早稲田大学人間科学学術院 教授 森田裕介 先生

○各地区通研大会への委員派遣

・東北・北海道地区通研大会（山形大会）

10月24日（木）・25日（金） 森山了一 委員

・関東地区通研大会（山梨大会） 9月13日（金） 全本部委員

・中部地区通研大会（長野大会） 9月19日（木）・20日（金） 山崎久登 委員

・中部地区放送教育研究協議会（石川大会）

10月16日（水） 熊走 翔 委員

・近畿地区通研大会（大阪大会） 9月20日（金） 藤澤さとみ 委員

・中国地区通研大会（広島大会） 6月13日（木）・14日（金） 全本部委員

・四国地区通研大会（高知大会） 7月 5日（金） 大澤浩祐 委員

・九州地区通研大会（沖縄大会） 11月14日（木） 15日（金） 新村久瑛 委員

○関東地区高等学校通信制教育研究大会（山梨大会）

・9月13日（金）午前10時から午後4時まで 山梨県立図書館

放送教育第3分科会 栃木県立宇都宮高等学校 教頭 興野寛久 先生

「本校通信制における放送教育の現状」

・指導助言者 星槎大学 准教授 土岐玲奈 先生

○NHK高校通信教育委員会 11月25日（月）午後1時から3時まで

・TEAMSによるWEB会議に出席し放送教育研究委員会の今年度活動内容を報告した。

○NHKグループとの連携

・「NHK高校講座」収録現場 見学研修会 本部委員6名参加

実施日：8月4日（日） 場 所：NHK放送センター（東京・渋谷）

内 容：「世界史探究」「家庭総合」収録現場の見学、情報交換会

・NHK高校通信教育委員会 11月25日（月）午後1時から3時まで

TEAMSによるWEB会議に出席し放送教育研究委員会の今年度の活動を報告

○研究委嘱校

・令和4年度～令和5年度（令和6年度全通研広島大会発表校）

中国地区：鳥取県立鳥取緑風高等学校

中部地区：長野県長野西高等学校

・令和5年度～令和6年度

四国地区：香川県立高松高等学校

近畿地区：奈良県立大和中央高等学校

・令和6年度～令和7年度

九州地区：佐賀県立佐賀北高等学校

中国地区：山口県立山口松風館高等学校

- ・令和7年度～令和8年度
東北・北海道地区：北海道芸術高等学校
四国地区：香川県立丸亀高等学校

3 関東地区高等学校通信制教育研究大会（山梨大会）放送教育 第3分科会 報告

○日 時：9月13日（金）午後1時20分から午後3時10分まで

○会 場：山梨県立図書館 1階 交流ルーム101

○研究協議：発表テーマ「本校通信制における放送教育の現状」

- ・発表者 栃木県立宇都宮高等学校 教頭 興野寛久 先生
- ・司会者 東京都立一橋高等学校 教諭 熊走翔 先生
埼玉県立大宮中央高等学校 教諭 藤澤さとみ 先生
- ・記録者 山梨県立中央高等学校 教諭 堀井浩二 先生

○指導助言：星槎大学 准教授 土岐玲奈 先生

「本校の放送教育の現状 ～NHK高校講座の活用～」という発表テーマで、栃木県立宇都宮高等学校教頭 興野 寛久 先生にご講演をいただきました。

高校講座は「自学自習のパートナー」（放送教育の手引）とされている。高校講座が生徒のパートナーとなるには教員もパートナーになることが求められる。宇都宮高校では高校講座活用者は17名中8名であった。活用者を増やすべく5月に積極的に取り組んでいる教員を講師に、高校講座のポータルサイトの活用方法について校内研修を実施し、7月に再度調査した際は、1名だけ活用者が増えた。

教員及び生徒の現状分析を経て、先生方の取り組み方について「放送教育をチョイ足し」をするといった手法、例えば「ピンポイント動画再生機能（1本丸ごとでなく、要点部分を開始/終了時刻で指定しURL生成し生徒に視聴させること）により、教師の話だけで理解するのではなく、生徒一人一人が探究する（考える）指導へ転換できた。」等が共有された。

以上のような具体的な取り組みの報告を受けて、星槎大学准教授 土岐 玲奈 先生より指導助言を受けた。その概要は以下になる。

学校で新しいことを実践することに対する抵抗もある中で『チョイ足し』という発想・方法論は秀逸である。また、先生方向けに研修することの意味と意義についても分析を解説された。高等学校学習指導要領解説 総則編に、面接指導の在り方として『自宅学習への示唆を与えたりするなど計画的、体系的に指導することが必要』と記されており、先生方の面接授業の取組みは、生徒が自分で勉強できるようになるためのサポート部分が重要となる。今は通信制に限らず『自分で学ぶ力をつけること』が大切で、NHK高校講座は、もし食わず嫌いがあればすごくもったいないことであり、その意味で『チョイ足し』の発想・手法で生徒が自分にとってのベストパートナーを探せるように、また、生徒に自分で学び方をアップデートしていけるようにさせるという志向は素晴らしい。面接授業を改善する方向性について語るとき、先生と生徒、生徒同士、先生同士などで意見交流し、双方向的につながっていくことができることが望ましい。自学自習のパートナーを見つけるためのお手伝いとしては、やり方を知っていれば必要なパートナーのところにすぐにたどり着けるようなスキルを持たせることが重要となる。先生達がメディア活用を通して、生徒たちを「学び」の方向に連れて行くこと、そして、その入口部分を学校で作ることも大切である。

質疑応答では、「放送視聴を面接指導に活用」する他の先生方の情報源について質問があり、NHKエデュケーショナル榎田晃様より、NHK高校講座ウェブサイトにある「活用例」ページの紹介がありました。今後の可能性を模索する上で大変参考になりました。

（放送教育研究委員会副委員長 東京都立砂川高等学校 副校長 原田 柊太）

中部地区

第 76 回中部地区高等学校通信制教育研究会 総会並びに研究協議会 長野大会

期日：令和 6 年 9 月 19 日（木）・20 日（金）

会場：ホテル信濃路 2 F（長野県長野市）

中部地区の長野大会は上記の日時・場所で行われた。二日間とも、充実した内容であり、主催者である中部地区高等学校通信制教育研究会の皆様、心配りが印象に残る大会であった。すべての内容を紹介する紙幅はないため、ここでは、第三分科会の二つの発表内容および、全体協議会での発表について紹介したい。

第三分科会では、まず、「本校における放送教育の現状と課題」として、長野県松本筑摩高等学校の教諭 山下香奈子先生よりご報告があった。ここでは、Google Classroom を用いた「再提出レポート」の扱い方、また高校講座を用いた放送教育の現状と課題について説明があった。「再提出レポート」を電子でどのように扱っていくか、各校とも頭を悩ませているところであるが、松本筑摩高校では、レポート全体の写真を添付させるなどの方法を用いることでこれを実現している。すぐに実践可能なものが多く、非常に有意な内容であった。

次に、「メタバース空間を利用した学習活動の実証実験について」として、愛知県立刈谷東高等学校の教諭 内田功生先生よりご報告があった。メタバースを用いることで、実際に生徒が授業に参加できるようになるのか、また発言をしたりするようになるのか、検証を行ったものである。実際にその画像などを紹介しての報告であり、大変興味深いものであった。まだ今後も検証が必要な段階であるとのことであったが、インクルーシブな教育を実現するうえで、さらなる研究の進展が待たれるところである。

全体協議会の研究発表として、長野県立長野西高等学校望月サテライト校副校長の柳沢勝美先生より、「通信制の新たな学びの場をめざして」として報告があった。同校は、令和 2 年 4 月に、長野県下初の公立サテライト校として開設されたものである。学びの特色としては、①最大週 5 日間登校可能であること、②地域と協働した探究的な学びの実現、③きめ細かな生徒支援の実現などがあげられる。学校に通いたいという生徒には、通学での指導を可能な限り実現し、さらに地域資源を最大限に活用して、生徒のキャリアデザインや探究活動へ結び付けていっている。これは、現場の先生方の大変な努力が想像されるところであるが、通信制の「理想郷」のように筆者には思えた。今後、こうした学校がさらに増えてくるのではないだろうか。

以上、ここでは報告できない、優れた研究報告や、説明があったことも付記しておきたい。最後になるが、運営をされた中部地区高等学校通信制教育研究会の皆様に、心からの御礼を申し述べて、小稿の結びとしたい。

（放送教育研究委員 東京都立砂川高等学校 山崎 久登）

中部地区放送教育研究委員会

中部地区の放送教育研究委員会は下記の通り実施された。NHK高校講座の各校の利用状況や各校での放送視聴票の運用実態などについての情報交換のほか、高校講座の具体的な活用法についての発表・講演もあり、有意義な会となった。

実施日：令和6年10月16日（水）

会 場：金沢勤労者プラザ 203 研修室（石川県金沢市）

協議内容：

（１）運営協議事項

ここでは、①放送教育研究委員会の当番校の確認、②令和7年度版「放送視聴のすすめ」リーフレット編集、③各校の放送教育の現状、の三点について協議が行われた。

（２）研究協議事項

●各校の放送教育の現状について

ここではアンケートの集計結果ならびに参加各校が持ち寄った放送視聴票をもとにして情報交換を行った。新課程科目の中で、現段階でNHK高校講座として作成され放送されていない科目について各校がどのように対応をしているのかと、放送視聴票の運用状況と様式の工夫についての2点を話し合い、情報交換を行った。12校より提出された放送視聴票は各々の様式（電子・紙の違いも含めて）が異なり多種多様であり、かなり活発に質疑応答が飛び交った。また、NHK高校講座のスクーリングでの活用に関しても話題が上がった。12校中7校がスクーリングにおいてもNHK高校講座を活用しており、活用校報告の中で、2023年3月より追加された新機能「ピンポイント動画再生」を活かしたスクーリングの展開が紹介され、参加者は強い興味を持ってこれを傾聴していた。

●講演Ⅰ『『NHK高校講座』 新作番組およびHP紹介』

NHKエデュケーションル コンテンツ制作開発センター 教育グループ専任部長 櫛田 晃 氏

2024年度よりテレビ放送の始まった「世界史探究」「物理基礎」「家庭総合」についての紹介と、新作番組を制作するにあたって付与した新しい特徴についての説明、および2024年度のNHK高校講座ウェブサイトの追加改修で実装された新機能についての解説をしていただいた。新作番組は総じて、単純な知識の提示・解説に留まらず、より主体的で深い学びへと視聴者を誘導するための数々の仕掛けを用意している、という印象であった。また新機能については「スキップ機能」「再生速度変更機能」「前回視聴を中断した地点からの再生機能」など、まさに現代の視聴者層の、主流の嗜好に合わせた改良であるという感想を抱いた。

●講演Ⅱ「中央教育審議会、通信制高校に関するニュース、個別最適で協働的な学び」

名古屋大学 デジタル人文社会科学研究推進センター 研究戦略部門 准教授 坂本 将暢 氏

中教審内にて示された「定時制・通信制の望ましい在り方」について、通信制高校在籍生徒が過去最多の29万人に達したことの意味、通信制高校において、どのようにして個別最適で協働的な学びを実現するか、といった内容を軸に多様な話題について講演いただいた。教育のDX化などについても率直なお話をしていただき、参加者にとって良い刺激となる内容であった。

（放送教育研究委員 東京都立一橋高等学校 熊走 翔）

近畿地区

期日： 令和6年9月20日（金） 会場：大阪私学会館

議長：足立 敦子先生（網干高等学校教頭） 記録：西本 将彰先生（八洲学園高等学校）

【発表1】提案者 岩橋 嘉大先生・榎本 良祐先生（青雲高等学校）

協議題「通信制高校におけるNHK 高校講座を活用した指導方略の検討」 青雲高等学校

1. 研究の目的

- 放送教育の分析視点を抽出し、青雲高等学校における実践を分類する
- 研究の成果と課題を示す

2. 兵庫県立青雲高校の概要

- 教育目標：「生きがいある生涯のために学ぶ力と生きる力をはぐくむ」
- 在籍生徒数：1,054 名 • 協力校：洲本クラス、柏原クラス
- 放送教育の取り組みとして、青雲 e-ラーニング（オンライン教育）を行っている

3. 放送教育の分析視点を抽出

先行研究について、通信制高校の現状及び実態・通信制放送教育における学びの質を高める研究として学び直しを支援するメディア教材の有効性、またオンライン添削システム等について分析し、放送教育の分析視点を抽出した。

4. 兵庫県立青雲高校の実践

視点①：個別最適な学び直し

- 単位修得率向上を目標に、スクーリングのスライドをA I 音声付動画にしてクラスルームで共有し、学びの最適化を図る
- テスト対策動画を作成し、間違いやすい部分を補強

視点②：協働的な学び直し

- 情報科でオンライン質問会を実施 • 理科も遠隔地の生徒向けにオンライン質問会を実施予定
- 今後の課題：協働的な学びの機会が不足⇒「総合的な研究」の時間等での実施を検討

視点③：個別最適な深い学び

- 映像（動画）の活用が理解の深化を促進する内容がある
- 生徒は動画をよく見ているという印象あり

視点④：協働的な深い学び

- 研修旅行の機会を活用し、旅行中にファシリテーターを務める教員の研修として、遠隔地の講師とオンラインでつなぎ、オンラインリハーサルを実施
- 旅行中にもオンラインでのワークショップを実施予定

7. 研究の成果と課題

成果として、放送教育の分析視点である①個別最適な学び直し、②協働的な学び直し、③個別最適な深い学び、④協働的な深い学びの4つの視点を抽出し、青雲高校の実践を分析した点があげられる。課題は、視点②の協働的な学び直しと④協働的な深い学びの実践例が不足している点があり、通信制における協働的な学びのあり方については、今後検討する必要がある。

【発表2】提案者 岡部 秀樹先生・上田 裕也先生（大和中央高等学校）

協議題「効果的な放送教材の活用について ～本校における放送教育の取組～」

1. 学校の概要

- ・普通科の単位制通信制 2008 年度開校、2024 年度から募集停止、2026 年度末で閉課程
- ・在籍生徒数（2024 年 5 月 1 日現在）：229 名（日曜クラス：104 名、平日クラス：125 名）

2. 教育課程の特色

- ・奈良県独自の必修科目「奈良 TIME」（郷土の伝統・文化・自然等の学習）

3. 放送教育研究委嘱を受けるまで

- ・対面によるスクーリングを重視（例：歴史総合は規定 2 回→実際 7 回開講）
- ・放送視聴はスクーリングの代替（視聴票）として活用

4. 放送教育研究委嘱（2023～2024 年度）

2023 年度は NHK 高校講座の視聴を進めつつ、各教科・科目において次の 4 つの視点で活用を検討

- ①学習内容の理解度向上 ②スクーリングの補完
- ③主体的で深い学びの促進 ④レポートへの活用（番組内容を取り入れる）

5. 大和中央高校における放送教育の位置づけ

- ・NHK 高校講座を視聴してレポートに取り組む（全教科）
- ・スクーリングの補助・補完：数学 I、地学基礎、文学国語など
- ・予習に活用：歴史総合・書道 I など ・復習に活用：地学基礎など

6. 具体的な活用例

(1) 国語編

ア) レポート内に NHK 高校講座を視聴して解答する問いを組み込む

イ) 生徒の感想から見える点として、番組を何度も聞き直せることが、生徒それぞれのペースに合わせた学習につながる点、番組視聴により新しい学習軸を得て、理解が進んだり学びの深まりを実感したりする生徒がいる点、また番組出演者の魅力が学習につながる点などが挙げられる。

一方で、理解や学習の深まりよりも、「手っ取り早く解答がほしい」生徒も存在する。

(2) その他の教科

ア) 家庭科：高齢者の生き方に関する番組を視聴→自分の考えを記述する

イ) 芸術科（書道）：書道家の技法解説を視聴し、筆使いを学ぶ

ウ) 理科（地学基礎）：番組の特定チャプターを指定して視聴する

エ) 数学・情報・保健体育：番組を視聴して答える問題をレポートに組み込む

7. 今後の取り組み

- ・放送教育のさらなる活用 ・教師側の教え方改革と生徒側の学び方改革
- ・NHK 高校講座を活用しながら、主体的で深い学びの促進へ

○まとめとして

高等学校における「学び」、「単位を修得する」とはどのようなことだろうと改めて考えるときに、現在の通信制高校における報告課題やスクーリングの内容や、学習への取り組みせ方と学校活動のあり方などが、本当に狙い通りの成果を上げているのだろうか、と考えることがあります。

そのような中で、「学びのあり方」について改めて検討するとき、青雲高等学校と大和中央高等学校のご発表は、多くの学校にとって非常に参考になる内容と感じました。発表後の質疑応答では、実践の内容から学校全体を巻き込む取組みの方法まで、さまざまな質問があり、たいへん活発で有意義な学びの機会となりました。

（放送教育研究委員 埼玉県立大宮中央高等学校 藤澤 さとみ）

四国地区

○四国地区高等学校通信制教育研究協議会

四国地区高等学校通信制教育研究協議会が下記の日程で行われました。

期日： 令和6年7月5日（金）

会場： 高知県立高知北高等学校 プール棟会議室

内容（敬称略）：

- ① 行政説明（法務省高松矯正管区少年矯正第一課長 武田朋士）
 - ・少年院在院者に対する高等学校教育機会の提供について
- ② 放送教育について
 - （1）NHK番組紹介（NHKエデュケーショナル 教育部 専任部長 櫛田 晃）
 - ・「世界史探究」、「物理基礎」、「家庭総合」3番組およびNHK高校講座ウェブサイト追加の新機能の活用例の紹介と意見交換
 - （2）研究協議（各校の現状と課題）
 - ・各校におけるNHK高校講座の利用方法
 - ・一人一台端末の実現およびデジタル的なツール活用に向けての現状と課題
 - （3）指導助言
 - ・NHKメディア総局 第一制作センター 教育・次世代 チーフ・リード 白井健大
 - ・放送教育委員 大澤浩祐
- ③ 放送教育委嘱校成果報告 香川県立高松高等学校 教諭 松本澄洋
テーマ「生徒の学習意欲向上のための放送教育教材の効果的な活用・開発」
 - ・コロナ流行の時期をへて「視聴票」の方途が拡大。「視聴票」の配布時期を早め、主体的な利用による加点等も始めた。
 - ・各教科の独自放送教育教材（動画）の制作が進んだ。それをみて課題に取り組む生徒数の増加および、より体系的な内容であるNHK番組の視聴者増加につながることを期待している。
- ④全通研報告、その他
- ⑤閉会挨拶（令和7年度香川大会への協力要請）

まとめ

NHKエデュケーショナルより、NHK高校講座の新番組やピンポイント動画再生などのウェブサイトの追加機能の紹介があった。また、「少年院在院者に対する高等学校教育機会の提供」について法務省からの説明があり、各校の事前の回答をもとに情報交換があった。これらの情報共有のみならず、参加各校のそれぞれの取組み、共通の課題山積なテーマ、令和7年度香川大会のことなど多岐にわたる内容で、半日参加は短く感じた。各校の共通認識として、生徒の自学自習や個別最適な学びのため映像教材の効果的活用が必要との認識があり、「視聴票」の限定的な利用のみならず、NHK番組活用の方途の多様化が分かった。

（放送教育研究委員 神奈川県立横浜修悠館高等学校 大澤 浩祐）

九州地区

九州地区高等学校通信制教育研究協議会

期日：令和6年11月14日（木）15日（金）

会場：沖縄県男女共同参画センターていりる

【発表】第一薬科大学付属高等学校 島崎 光太 先生

主題：「A Iを活用した、独自の視聴学習課題作成と提出・採点に関するシステムの提案」

1. 学校概要

昭和31年に個性教育を理想として創立された福岡第一高等学校に隣接する姉妹校として、昭和41年に創立された全日制課程と広域通信制課程の併設校である。スクーリングは福岡本校・渋谷キャンパスで実施されており、週1回か、年に1回4～5日間連続での集中スクーリングとして実施されている。

さまざまな背景を持つ生徒が在籍しているが、直近の3年間の入学生徒は中学3年生からの新入学生徒の割合が大きくなっている。P a r a m a 塾（外部講師による課外活動）などの実施も行っている。学習内容や仕組みについて、生徒のニーズに合わせてD X化を進めながら、個に応じた学習環境を提供できる学校づくりに取り組んでいる。

2. 現状

<D X化の流れ>

令和3年度より独自ドメイン取得、Google によるアカウント管理を開始した。コロナ化における面接指導は ZOOM によるオンラインで実施され、定期考査もオンライン実施した。令和4年度には生徒1人につき1アカウントの運用、生徒専用H Pが開設された。令和5年度には学習状況確認の完全オンライン化、出席記録のオンライン入力化も進み、令和6年度にはレポートも一部をのぞきオンライン化されている。3種類のオンライン学習ツール（教科書授業インターネット講座、自立学習応援プログラム「すらら」、スタディーサプリ）で学習をサポートしている。D X化の組織構成については全日制とシステムを共有しており、福岡第一高校と第一薬科大学付属高校の全日制にいるI C T担当とも連携しながらD X化を進めている。

<放送教育について>

ネットコースの生徒はほぼ100%、スタンダードコースの生徒は10%ほどの生徒が放送視聴票を使用している。

ネットコースの場合は、減免制限枠の10分の6の活用のため、教科書授業インターネット講座を視聴することを義務化して条件を満たしている。また、10分の8の減免を活用せざるを得ない生徒には自立学習応援プログラム『すらら』との併用も活用して条件を満たしている科目もある。

<今回の提案の目的>

視聴学習用の報告課題（以下視聴票）は感想文形式を取っているが、視聴しなくても書けてしまう可能性など、視聴の確認や学習内容の定着の確認という点で問題があった。この視聴票と添削において、NHK高校講座のコンテンツを用い、A Iを活用することによって効果的で効率的な視聴票作成を目指している。また、その取組みを通して、生徒の実状に即した質の高い学習教材の提供と採点業務の効率化により、教員と生徒間が直接かかわる時間をより多く確保し丁寧な指導を行う環境づくりを目指している。

<内容>

◎第一薬科大学付属高等学校での視聴票は「まとめ・感想文形式」のフォーマットである。

まとめ・感想文形式の課題点として「視聴教材を視聴しなくても、タイトルから想像し視聴票を作成することができる」という点が挙げられる。また、まとめによる視聴内容の確認には書かれた内容の整合性を確かめる時間が必要となるが、内容の確認は文章形式以外で行うことができる。

- ➡ 「まとめ」部分に関しては視聴学習を確実にを行ったことを確かめるために、動画中で話される内容確認による確認問題作成を行った。
- ➡ Google classroom と Google form を組み合わせたシステムを使用。返却まで行う。

◎視聴学習で使用するのはNHK高校講座である。

- ➡ 映像資料からの作問となれば、非常に多くの時間を要する。
- ➡ CLOVA note β 版を使用しNHK高校講座の内容を文字起こしする。文字起こしから作問の補正・模範解答編集までにかかった時間は6分40秒で、30分かかっていた作業時間が大幅に短縮された。

これらのシステムを使用し、一問一答など正答が決まった問題については採点を全て自動化し、教員は自動採点の確定と記述部分のみ採点する。視聴学習の確認も効率的に行うことができる。

<課題・まとめ>

今回提案されたAIを活用した視聴学習課題作成と採点システムは、通信制高校の教育のDX化を進め、教育内容の質の向上において重要である。しかし、今回使用された各ツールは無料版や安価なシステムだが、場合によっては維持管理に関する費用が上昇する可能性がある。加えて教員・生徒へのサポートも必要である。また、AIによる自動採点では対応できない記述式問題などは、人の手による評価が依然として求められる。

今後はシステムの精度と利便性を向上させるための研究と開発を持続させていく。生徒の学習データを活用し指導改善に活かし、教員の資質能力の向上をはかるなどさらなる発展が期待される。

【研究協議および情報交換】

発表校の事例や積極的な取り組みにより、活発な情報交換が行われた。

①生徒の何割が放送視聴を利用しているか。

- ・ネットコースの生徒は約100%、スタンダードコースは約10%が利用している。

②何時間の視聴で1回分の視聴にしているのか。

- ・基本的には、100分だと100分以上見て1回分としている。ただ、オンラインの『すらら』となるとそれ以上の時間になる。ネットコースの場合は、視聴学習にはNHKの高校講座以外のインターネット講座、東京書籍が提供しているものを使用しており、1科目あたり10時間ぐらいの視聴学習があるので、かなりのボリュームを生徒たちは観ている。コースによって異なる。

③新宿山吹高校が導入している『MOCA』のeレポートシステムと比べて、異なる部分や第一薬科付属高校さんの発表を聞いて、ここはいいなと思う点は何か。

- ・基礎問題はシステムが自動採点し、応用(記述)問題に関しては教員が採点をし、自動採点を教員も確認する、という流れは同じである。異なる部分は、視聴をした上での課題採点は教員が行い、それを『MOCA』(本校だと学習システム『まなぶき』)で運用している。『まなぶき』のシステムの運用に関しては、外部の業者に委託をしている。教員がそのシステムを調整することも可能。外部業者と分業して行っている。(新宿山吹高校)

④どの教科科目までで活用について考えているのか。

- ・ネットコースは東京書籍のインターネット講座、動画による視聴が確認できる。教科書が動画に対応していない家庭科、美術、体育は、教科書はあるけれども動画コンテンツはインターネット

講座しかない、そういうものに対して活用していきたい。

⑤返却結果通知方法を教えてほしい。

- ・生徒氏名、学籍番号、出席状況、レポートの通数、成績評価が入っている生徒の確認できるページに教員はレポートの評価だけをシステム上で転記する。

⑥ICTに関する教員の組織はどうなっているのか。ネットコースは対面のスクーリングはどれくらい実施しているのか。

- ・福岡第一高校、第一薬科大学付属高校の全日制にICT担当がおり、連携を取っている。
- ・ネットコースの場合は10分の6の制限枠いっぱいでは減免した残り、科目によっては『すらら』の視聴も活用して、10分の8制限枠いっぱいでは減免した残りに参加させる。

⑦生成AIを使った作問は、視聴票以外の小テスト的なものや、レポートの作成などにも使われているのか。また、その予定はあるのか。(NHKエデュケーショナル 榎田様より)

- ・基本的には視聴減免のために視聴学習コンテンツとして使用している。

⑧東京書籍の動画コンテンツの名称は何か。

- ・東京書籍のインターネット講座。ほぼ全ての教科書を網羅しており、一部の科目が現在作成中。

⑨各校のICT活用状況について説明してほしい。

- ・全通併修をしている。iPadにロイロノートを導入。
- ・本校は1人1台のタブレットを持っていない状況。さらにアカウントも配付できない状況。なかなか生徒にICTを使わせるという機会が持てていない状況。
- ・「すらら」や「スタディーサプリ」などを利用している学校もあり。
- ・生徒に対してはGoogleアカウントを配付しておらず、Teamsを活用。通信制についてはiPad等の端末の貸与はなし。
- ・Microsoftアカウントは全職員、全生徒に配付されている。端末についても職員については1人1台配付されている状況だが、生徒については各自で購入。
- ・令和4年度から一部の科目を除いてほとんどが電子レポート化され、それに伴って生徒に1人1台端末を配付している。Office365のアカウント、BYODにて全ての生徒が持っている。

⑩NHKエデュケーショナルさんより

2023年の3月に高校講座のホームページを大幅にリニューアルした。主にネットだけでも7つ位の新しい機能を付加している。ぜひ活用してほしい。

○まとめとして

今回、発表校の島崎光太先生の多大なるご尽力の成果を実感するとともに、学校現場のICT化はできる部分から先進的に進めていかねばならないと考えた。教員側の業務負担を減らすことで効率的かつ効果的に指導を進め、生徒の自律学習を支援し、学びの質を高めていくことが期待される。

今回の分科会では、デジタルのレポート添削やオンラインでの学習ツールについての情報を求める声もあった。手段が目的化してしまうのではなく、主語である生徒にどのような力をつけさせたいのか、教員の役割をどこまでAIが担うのかというところは、常に考えるべきである。さまざまな事情を抱える生徒の存在やAIなどの目覚ましい技術の発展など、通信教育をとりまく環境も急速に変化する中で、今後より一層のICT利活用に向け、活発な情報交換が必要と考える。

(放送教育研究委員 東京都立新宿山吹高等学校 新村 久瑛)